

令和2年7月豪雨水害 人吉市支援中間報告会 報告書

震災がつなぐ全国ネットワーク事業担当

浦野愛（認定NPO法人レスキューストックヤード常務理事）

■目的

災害発生から11か月経過した、令和2年7月豪雨水害における被災地の復興状況と課題の全体像を共有する。その上で、震つなネットワークで継続中の人吉市へのサロン支援、および、各会員団体による支援活動の進捗状況を共有し、水害への関心の風化防止と、震つなネットワークとして、さらに被災地を応援できる可能性について考える。

■開催日時

2021年5月20日（木）19:00～21:00

■形式：Zoomによるオンライン

■参加団体・個人：36名

【震つな会員団体・個人】

FUSSA/レスキューストックヤード/なごや防災ボラネット/茨城NPOセンター commons/ピースボート災害支援センター/静岡県ボランティア協会/被災地NGO協働センター/ADRA Japan/はままつ子育てネットワークぴっぴ/かながわ311ネットワーク

高橋亜弥子/津賀高幸/飯嶋麻里/菅磨志保/橋本 笙子

【会員以外の方々】

日本財団/株式会社デンソー/NHK/あらいぐま大阪/個人3名

■スケジュール

・19:00～19:05

挨拶（栗田/震つな共同代表）

・19:05～19:20

熊本の現状と課題（樋口氏/KVOAD）

・19:20～19:50

震つな会員による技術系支援について

アーキレスキュー人吉球磨との協働による被災者対応活動（小出氏/ADRA Japan）

・19:50～20:30

震つなネットワークによるサロン支援

① 経緯と概要（種村/震つな事務局）

② 現地報告「サロン支援の意義と効果について」（山脇氏/PBV）

③ 支援に協力した震つなメンバーからひと言

・20:30～20:50/意見交換

・20:50～21:00/インフォメーション・挨拶

※全体司会：津賀、各パート進行：松山・浦野

■内容

1) 挨拶（栗田/震つな共同代表）

コロナ禍初の災害となった令和2年7月豪雨水害の球磨川沿線の様子は、「まるで津波のようだった」と表現された。雨が降る度に、次の災害への不安を抱えている方がほとんどだと思う。今回の報告会を通じて、継続して支援できることを考えたい。

2) 熊本の現状と課題（樋口氏/KVOAD）

▶KVOADとは

KVOADは熊本地震をきっかけに、県・社協・民間団体間の活動調整を目的に発足したネットワーク組織。毎週火曜日に「火の国会議（これまで86回開催）」を通じて、3者連携を継続中。

▶令和2年7月豪雨水害での対応と課題

熊本県では、新型コロナ対策として、早い段階から県とKVOADで車中泊の対応やコロナ禍のマニュアル作りなどについて検討を進めていた。7月4日

の豪雨発生直後から、KVOAD には、全国から支援の申し出や相談を頂いていた。しかし、行政や社協の判断を待たずに、独自で要請を出すことは適切ではないと判断し慎重に対応した。現在、新型コロナは第 4 派到来中で、蔓防が発出されているため、我々も市町村へ出向けていない状況。しかし、「火の国会議」はオンラインで継続できるため、支援者の情報共有の場は機能している。地元支援団体および、社協や地域支え合いセンターのつながりも強いため、情報は随時入ってきている。特に人吉、球磨村、八代の被災者は、生活再建の見通しが立っていない方が多い。今回の水害で顕著になったのは、家屋保全について、災害ボラセンや行政ができることには限りがあったことだ。これらの隙間を埋めてきたのが民間の力だった。特に地元の支援団体が直接支援を行っているケースが多くみられる。また、今回の水害を経て見えてきた課題は以下の通り。

- ① 被災した地元側で受援の在り方を総合的に判断できる仕組みが必要。(行政や社協などとの連携に地域の感染や医療体制などの医学的視点も加える必要あり)
- ② 専門性のある支援団体と災害 VC のボランティアの受け入れ方法を整理する必要あり(専門性のある支援団体と災害 VC の募集範囲とは分けて考える、コロナ禍における支援と受援の整理)
- ③ 支援を実施する又は受け入れる条件を整理する(支援を行うに際しての報告や相談の徹底、要請側の瑕疵や感染発覚時対応の事前検討)
- ④ 支援する側へのお願い(感染が広がっている地域で支援することへの影響を考えておく)

▶震つなへ伝えたいこと

地元側からすると、震つなの活動が見えづかった。コロナの警戒レベルが上がったにも関わらず、支援に入った団体がいて、それが、助成金による活動なのか、震つなネットワークによる活動なの

か、団体単独の活動なのか、どのスタンスで動いているのかがよく分からず、対応に苦慮した。この件については、地元支援団体からも同様に疑問の声が上がっており、これらの事実もあったことは受け止めて頂ければと思う。

3) 震つな会員による技術系支援について

アーキレスキュー人吉球磨との協働による被災者対応活動／小出氏 (ADRA Japan)

▶これまでの経緯

ボランティアと建築の専門家が連携することで、家屋保全の後の本格的なリフォームへの移行がよりスムーズになるのではないかというアイデアから、地元建築士・上村氏が「アーキレスキュー人吉球磨」を設立。この動きに、風組関東、ADRA Japan、被災地 NGO 協働センター、一般社団法人おもやいなどが協力し、家屋相談やカビの調査、人吉商工会議所・人吉旅館・地域支え合いセンターでのカビ対策の講習会開催、被災した公民館やよりあい場などの復旧と集いの場づくりなど、総合的な支援を行った。

▶被災地における課題と活動内容

2019 年に台風で被災した千葉県では、ボランティアによって泥かきから乾燥までの一連の作業を早い段階で終えることができて、需要過多で地元業者が対応しきれず、リフォームや解体に時間がかかるという課題があった。人吉市の被害は、浸水深が高く、被災件数も多かったため、同様の課題が生じることが予測できた。そのため、アーキレスキューでは、限られた予算で再建できる手法の提案や、対応できるマンパワーの提供を行ってきた。活動の中で、「高齢なのでお金かけられない」、「自力で業者が見つけれない」などの福祉的ニーズもみられ、ケースマネジメント力のある人の介入や地域支え合いセンターとの連携も必要であると感じた。

このような地域のニーズをキャッチする場として、2021 年 1 月から仮設公民館に「コミュニティ

カフェ」をオープンさせた。新型コロナの影響もあったが、住民が週に数回お茶飲みに来てくれた。7月に入り、新型コロナが落ち着いた頃には、社協デイサロンや竹細工のワークショップなども再開され、近隣小学校の遠足の立ち寄り所として、地域に認知されるようにもなった。被災地 NGO 協働センターの発案で、プレパーク兼足湯イベントも行った。最近では地域の方が花や野菜の手入れをしてきている。仮設公民館を介して、複数の町内会の人たちとの交流も生まれ、役員らからは、今後の町内会活動への悩みなども聞かれるようになった。そこで、とちぎ V ネットの坪井さんに協力してもらい、700 世帯を対象にして調査を実施。

「次の災害が怖い」「前回の災害の時に防災無線が聞こえなかった」という声を聞いた。

また、一方でアーキレスキューが第 2 の拠点を構えた、仮設商店街の一角では、足湯の講習会を実施。現在は新型コロナで自粛中だが、物資配布も行い、地域の支援に取り組んでいる。地元の方々を中心にしつつ、外部支援者との連携が支えになると思う。

▶頼政氏（被災地 NGO 協働センター）よりコメント
今回の取り組みは、技術系支援と生活支援系支援を得意とする、震つな会員同士の連携の成果だったと思う。私たちも仮設商店街に、第 2 拠点ができた時には、足湯等を通じて、子どもたちなども交流できる場になると考え、コミュニティ支援の一環としてお手伝いした。常時人員を置くことはできないが、今後の課題や必要な支援については、オンラインを駆使して地元の方々と随時情報交換しながらサポートを続けている。

4) 震つなネットワークによるサロン支援について

▶これまでの経緯と活動概要／種村（震つな事務局スタッフ）

令和 2 年 7 月豪雨が起こってすぐに動くことはで

きなかったが、その後も支援に関する議論は継続していた。震つなは、PBV を通じて、人吉市社協と地域支え合いセンターからの要請のもと、中断していたサロン活動の再開支援を行うこととなった。サロン活動の再開は、孤立や生活不活発病防止、コミュニティの再興にもつながる。具体的な取り組みは以下の 2 点。

① サロン活動を通して参加者から聴かれた声に応える活動（相談会・講習会などサロンコンテンツの提供）

地域支えあいセンターが実施する下原田第三仮設団地でのオープンカフェにて、過去震つな会員が関わった愛媛県西予市、熊本県御船町の木造仮設で生活された経験のある方々をオンラインでつなぎ仮設の住まい方の工夫などをお話いただく企画を実施。

② 人吉市サロン活動に贈り物と応援メッセージを届ける活動

人吉市内の 53 地域の公民館とみんなの家 12 施設でのサロン活動。人吉市社会福祉協議会が実施している地域サロンを中心とする市内でのサロン活動に対し、震つな会員に協力を呼びかけ贈り物（例：ご当地のお菓子や手づくりマスクなど雑貨類）とメッセージを届ける。（2021 年 12 月まで継続）。サロン活動への参加意欲を高めてもらうと共に、全国各地よりエールを送ることで被災された方々の心に寄りそう。

▶山脇氏（PBV 現地コーディネーター）より報告

① 木造仮設住宅の住まい方相談会

仮設住宅のあれこれ

～愛媛県西予市、熊本県御船町と繋いで～

・開催日：2021 年 4 月 15 日（木）13：00～14：00

・場所：下原田第三仮設団地

・形式：Zoom によるオンライン

・参加者

【人吉市】

下原田第 2 仮設団地 4 名／人吉市地域支え合いセ

ンター2名/PBV1名

【熊本県御船町】

元木倉南仮設住宅住民2名/一般社団法人スタディライフ熊本1名/RSY1名

【愛媛県西予市】

西予市つつじ団地(野村仮設団地):15名/NPO法人シルミルのむら1名/震つな個人会員(飯嶋氏)「オープンカフェ」は、人吉市地域支え合いセンターが企画運営する集いの場。仮設住宅に設置された集会場「みんなの家」11カ所、社務所1カ所で開催中。新型コロナの影響を受け一時中断していたが、最近ようやく再開。常に5人~20人程度が入れ替わりで参加しており、いつも楽しみにされている。相談会開催のきっかけは、「仮設住宅での暮らしの先の見通しへの不安」「住んでいた人の話を直接聞きたい」という住民のつぶやきだった。地域からは「表札が出ていない人がいて、コミュニケーションがとりにくい」「集会場はあっても、まだうまく使えてない」などのお悩みと共に、「みんなが集まれる機会を沢山作って互いに励まし合って乗り切りたい」という力強い声もあった。御船からは、表札づくりや、365日続けたラジオ体操などの事例、西予からは、食事会や縁側ベンチ等の事例を紹介頂いた。また、お互いのこれまでの頑張りをねぎらい合い、感謝の気持ちを伝え合う姿も印象的だった。

② 人吉市サロン活動に贈り物と応援メッセージを届ける活動

【これまでの協力団体】

実施時期	協力会員	贈り物	数量
2021年2月	レスキューストックヤード	なごやん(饅頭)	300名分
2021年3月	静岡県ボランティア協会	わさび・桜えびせんべい	500名分
2021年4月	FUUSA株式会社	ハンカチ・メガネ拭きセット	100名分
2021年5月	はままつ子育てネットワークびっぴ	クッキーやおせんべいなどお菓子の詰め合わせ	30名分

人吉市内53地域中、被災した公民館は10地域。

現在は、ほとんどの公民館が復旧・仮復旧したので、サロン活動を再開している。2月15日より、震つなからの全国応援エールと贈り物を届けている。住民の方々は、珍しいお菓子や、思いがけず遠くから応援が届くことに感激する方が多い。仮設住宅への転居で、元いた地域を離れてしまった方にとっても、サロンはみんなと再会できる貴重な機会となっている。

▶現地からのビデオメッセージ

- ・人吉市地域支え合いセンター
- ・人吉市社会福祉協議会

支援を受けた住民の方々の様子や現状の課題などを感謝の言葉と共に伝えて頂いた。

▶震つな参加団体・個人からのコメント

★飯嶋氏(震つな個人会員)

西予市の方からは、自分たちの経験や、これまでの支援に対する感謝の気持ちを伝える良い機会になったというコメントを頂いた。西予市でも新型コロナで集まる機会が激減していたが、今回15人もの方が参加してくれた。今年の夏の仮設退去を前に、最後の交流の機会にもなったことがよかった。個人的には、震つなネットワークの企画だったので、個人会員の私でも参加することができた。団体や支援経験などを超えて、みんなで企画を考え、取り組めた雰囲気がとてもよく、参加できたことが嬉しかった。

★清水氏(静岡県ボランティア協会)

私たちがやれたことはすごく小さいこと。しかし、直接行けなくても、震つなネットワークを通じてできること、コロナでもやれることをつないで頂いた。微々たるものだが、私たちの気持ちも届けて頂き、とてもありがたかった。震つなの会員でよかった。ビデオメッセージで現地の様子が知れたのも嬉しかった。

★中原氏(FUSSA)

震つな事務局から協力要請を頂き、「こういう支援

もやれるんだ！」と初めて気づいた。震つな会員でなかったら気づけなかった活動。少しでも被災地の方が喜んで頂いたのであればうれしい。直接支援だけでなくこういう支援があってもよいと思った。

★原田氏（ぴっぴ）

震つな事務局から支援の話を聞き、ようやく先日おくれたのでほっとしている。こういう場があることが心強く思った。自分たちも被災した時に助けてもらえるかな、と思えた。

★岡田氏（なごや防災ボラネット）

今までRSYと一緒に現地に入り、足湯やサロンをしてきたが、今回新型コロナの影響で、現地に行けず悶々としていた。でも今回の企画に参加できることが分かり、プレゼントを何にするか、会のメンバーで一生懸命考えた。これをご縁に、いつか皆さんに会いに行きたいと思う。

5) 意見交換

★樋口氏（KVOAD）

今回の活動報告を聞いて、皆さん頑張っているということが分かった。ただ、地元で同じような活動している団体もいっぱいいるのに、その団体との連携は薄かったように思う。熊本から毎日のように関わっている学生チームなどにつなが、今までの知見を伝授するということが、地元での人材育成につながる。KVOADに相談を頂いていたら、地元の人をもっとつなぐことができたのではないかと反省している。今後、地元の団体を活用頂ければと思う。

★横田氏（栃木 NPO センター・コモンズ）

常総市の水害の時には、仮設住宅が作られなかったのが、その対応の難しさは想像ができなかった。アーキレスキューの取り組みで紹介された「家の中に家を建てる」というのは面白い発想だった。現在、栃木でも、あの水害で被災した家を修復・リフォームして、4件目の拠点を作っている。6月に

大分と熊本にお邪魔したいと思っている。

★中原氏（FUSSA）

建築家の方々が活動する際に、有償化をどう調整するかというのは難しかった。以前の経験では、地元の商工会につなぎ対応した。地元の事業者は信頼も厚いし、特に大きなトラブルにもならなかった。

★伊藤氏（かながわ 311 ネットワーク）

熊本地震の時に宇城市に関わったので、最近の雨続きで気になっていた。横浜市も新型コロナの影響で、団体メンバーと会えない状況が続いていた。人吉サロンのエールとして、横浜市のおいしいお菓子を つなぐ道を探そうと考えています。

6) 挨拶（樋口氏／日本財団）

KVOAD 樋口氏からは、普段から感じている「ネットワーク」や「外部支援」の難しさ、課題を指摘頂いた。これは、今後の災害においても共通課題である。被災地支援を行う顔ぶれには、地元の中間支援組織と支援団体、震つなのような外部の中間支援組織とその加盟団体など、様々な顔ぶれが存在する。その中で、事務局同士、あるいは団体同士が個別につながるパターンもあれば、団体単独で直接現地につながる可能性もある。いろんな形があってよいが、今回は、新型コロナの影響で一体的に動けなかった。今回の取り組みは、外部から現地入りした団体が、地元団体と連携し、仲介役を担うことで、外部からの支援の輪を広げ、つないでいったケースであり、これこそがネットワークが機能する価値なのだと思う。引き続き、中間支援を担う震つなの事務局の役割として、一つひとつの事例を、埋もれさせることなく全国に紹介して頂きたい。コロナ禍で、ネットワークの価値と課題を改めて認識した。また、被災地は人吉市だけではないので、球磨川流域の他の地域にニーズがあれば、つなぐ役割も見出して欲しい。日本団としてもその動きを応援する。